The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	脳性まひ者の身体の現象学を起点とする障害者支援の再構築
Author(s)	河合, 翔
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61434
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　河合　翔　）	
論文題名	脳性まひ者の身体の現象学を起点とする障害者支援の再構築

論文内容の要旨

博士論文の第一の研究目的では、アテトーゼ型脳性まひ者の緊張が生じる際に、意識下で起きている身体感覚のメカニズムを解明する。その上で、第二の研究目的では意識下のメカニズムから緊張を弛緩させるアプローチを導出し、脳性まひをもつ当事者の立場から動作法のアプローチの新たな可能性を動作法の施術者に向けて提言する。したがって、研究手法として、現象学的アプローチを採用する。なぜなら、本研究は、脳性まひ者本人が感じる感覚を、その本人が感じている時点での状態から記述することを方針としているからである。そして、この方針が、自然科学によって客観化される以前の志向性や身体運動の生成を解明する現象学の方針と合致するからである。第三の研究目的では第二の研究目的で導出した緊張を弛緩させるアプローチをもとに、支援者と要支援者という対人関係の分析から障害者支援の再構築を試みる。さらに、第四の研究目的では＜ニーズを支える支援＞という観点から障害学における社会モデルを再検討する。

次に具体的な研究内容を述べる。まず、第一の研究目的では、緊張が生じる際の身体感覚のメカニズムを解明する際に、身体と地面との関係に着目する。なぜなら、身体はただ「動かそう」という意志で動くのではなく、地面によって足の置き方や動作の方向、緊張の程度を受動的に規定されているからである。

そして、本研究での「地面」、「受動性」という概念と、古典的現象学のそれとの差異を明確にするため、メルロー＝ポンティの『知覚の現象学』を随時参照する。そして、アテトーゼ型脳性まひ者の身体の経験から現象学における概念を捉え返すことにより、志向性や受動性といった古典的概念を再構築する。

次に第二の研究目的では、弛緩アプローチを解明する際の具体的な研究対象として、心理学分野で実施されている臨床動作法というリハビリテーション・アプローチを取り上げる。なぜなら、動作法は元来、脳性まひ者の身体の緊張を弛緩させるために考案されたものであり、また床に寝ころんだ状態で弛緩させる訓練方法だからである。つまり、床に寝ころんで、身体をリラックスさせた状態から、施術者が手や足といった特定の部位をマッサージするように触れていくことで、手や足を弛緩させる。したがって、動作法の訓練体験を記述することは、第一の研究目的で解明した身体と地面との関係から、緊張を弛緩させるプロセスを明らかにすることにつながっていくのである。

第一・第二の研究目的・内容から導出された分析結果を基に、第三の研究目的では筆者がリハビリのために入所していた施設での援助や集団生活での支援のあり方に関する問題点を分析する。また学校教育における障害児支援の分析から、学校や教員が代わるたびにどこをどう引き継げばよいのか、“引き継ぎ”の場面にスポットを当てて分析する。また“ニーズを調整する間合いをいかに生み出すか”という視点からヘルパーに介助してもらう際の歩行介助や食事介助を分析する。

第四の研究目的では、社会モデルが構築された経緯や背景が記述された障害学の主要文献を検討する。その上で第三の研究目的で実施した研究を下地に、身体的な苦痛や負担を軽減するという観点からいかに社会モデルを生かすことができるのかを考察する。

以上の分析・考察から、次のような本研究の目的・意義が浮かび上がる。それは第一に、アテトーゼ型脳性まひにおける緊張の構造・意味を解明することで、脳性麻痺研究において新たなパラダイムを提示すること、第二に、動作法において、実際に訓練を受けた経験から既存の動作法枠組みとは異なる見方・効果を明らかにすることである。第四に、上述の緊張の構造の分析から緊張とは訓練や支援と折り合いをつけようとしている営み、つまり支えを必要としているニーズだといえるため、学校教育での障害児支援や入所施設での対人関係などを事例に要支援者のニーズを中心とした支援を再構築し、障害学が築いてきた社会モデルに新たな知見をもたらすことである。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　河合　翔　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	牟田和恵
	副 査	教授	村上靖彦
	副 査	准教授	辻　大介

論文審査の結果の要旨

本論文は、アテトーゼ型脳性まひ当事者として生きる著者が、医療やリハビリ体験から抱いた違和感や問題意識をもとに、緊張をはじめとする身体の反射的動作に着目するところから、脳性まひ者の身体メカニズムについて現象学的枠組みを用いて再解釈しようとするものである。

本論は大きく二部構成を取るが、まず第一部では、地面・地盤といった概念をもちいて、アテトーゼ型脳性まひ者の身体を、脳性まひ者のリハビリに用いられる動作法に即して検討し、その上でメルロ＝ポンティの＜世界を方向付ける身体＞論を再考しとらえ直す。まず第一章は、医学的にとらえられる脳性まひ身体の理解の不十分さを明らかにしたうえで、第二章で動作法で把握される「動作の主体」の現象学的身体論との近似性を見出し、第三章でアテトーゼ型脳性まひ者の緊張は「自分を支えてくれるはずの地面」に運動や行為を制限されることによって生じることを説得的に述べる。そして続く第四章で、この地面ないし地盤を「人間が生きるための活動を支える基盤」と抽象化し、メルロ=ポンティの＜世界を方向付ける身体＞論の再解釈を試み、「志向性」や「受動性」といった古典的概念を再構築している。

論文後半の第二部では、第一部で論じた脳性まひ者の身体メカニズムへの理解に基づき、緊張の意味を当事者目線で解明し、一見健常者とは異なる動作に隠されたニーズを明らかにして、リハビリや障害者支援のあり方を再構築する。第5章で動作法リハビリ現場のトレーニーとトレーナーとの間、自己と他者の間で生じるズレを具体的に叙述したうえで、第6章では、自身が受けてきた「支援」を振りかえり、支援の受け手のニーズと提供側のズレがしばしば起こりがちであり両者の「折合い」によって創造的な支援が生まれてくることを説得的に論じている。さらに第7章では、第一部で現象学の枠組みを用いて論じた地面・地盤の概念を拡張して福祉制度自体を「人間が生きるための活動を支える基盤」としてとらえ、それが適切な受動的基盤となるならば障害者が自らの主体性を発揮するための支えを生み出すと述べる。そして、障害者差別解消法の法が求める「合理的配慮」について、それが障害学の「社会モデル」から発していることの意義と限界と、障害学におけるメルロ=ポンティの身体の解釈の問題点を指摘して、障害者に対する支援や配慮が＜支援や配慮を受ける側の主体的な行為＞を支える方向に機能すべきことを論ずる。また、社会モデルが健常者と障害者の二項対立をむしろ先鋭化し健常者社会への参入条件を作っていることを鋭く批判している。

以上のように本論文は、現象学の既存の概念をずらす新たな身体論の枠組みを提示したこと、および動作法などのリハビリテーション分野、障害福祉分野に貢献をもたらしうる知見を提供している。とくに障害者支援の現場で効果的に機能し得る提言を行っており、これらの分野へのインプリケーションによって、論文のタイトルに示されているように「脳性まひ者の身体の現象学」とそれを起点とした「障害者支援の構築」が発展することが期待される。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。